

Rest and Invest in the West —Silas Weir Mitchell, Theodore Roosevelt、 『ヴァージニアン』の治療的エコノミー

Rest and Invest in the West:
The Therapeutic Economy of Silas Weir Mitchell, Theodore Roosevelt,
and *The Virginian*

齊藤弘平
Kohei SAITO

1. 西部と神経衰弱

銃、投げ縄、暴れ馬、砂埃まじりの突風にはためく酒場の扉—これらの要素と戯れながら、男性たちが演じる「自己修養、揺るぐことのない意志、知恵と技術と創意工夫に裏打ちされた行動と、華麗なる判断力」のドラマが西部劇である。¹ そこでは、「フロンティアにおける暴力」(frontier violence) が、善玉と悪玉の間の争い、土地所有を巡る不和、インディアン部族と開拓民の衝突などにおいてきまって発生する。また、アメリカという国家が西漸し自由や民主主義という価値を拡大させていく歴史をきわめて限定された地域や共同体のエピソードに寓話化したものが西部劇だと理解されると、その暴力は正当化もされる。² これらのことは、文学にせよ映画にせよ、西部劇に触れたことがある者ならば誰もが知るところだろう。しかし、西部劇という物語ジャンルの創生と、神経衰弱 (neurasthenia/nervousness) という病の治療が切っても切り離せない関係にあるということは、ほとんど誰にも知られていないだろう。

1869年にニューヨークの神経科医 George Miller Beard が論文において発表して以来、またたく間に人口に膾炙した新しい疾患、それが神経衰弱である。Beard は不眠、消化不良や眼精疲労から、冷え性や髪の毛の乾燥まで、あらゆる症状を神経衰弱の発現として診断した。³ それにしたがって、該当する患者数は、都市部に住む中流階級以上の男女、とりわけ頭脳労働者たちの間で急増する。Beard が 1871 年の著作『アメリカの神経衰弱』(*American Nervousness*) でまとめているように、神経衰弱とは、近代特有の過度の生活環境の文

明化やそこで要求される社交や職務における規範の強化、そして長時間の頭脳労働によって、人間の「神経エネルギー」(nerve energy)が消耗されてしまうゆえに発症する。ほとんどの医師と一般の患者たちに、このような理解のパラダイムが共有されていく。またこの病は、急速な発展と文明の進化を誇る近代のアメリカであるからこそ発生する、と **Beard** は断言する—「神経衰弱は近代の病でありまたアメリカ独自の病です。他のいかなる時代も、いかなる国も、いかなる形の文明も […] その栄華の最中にこのような病気を有してはいませんでした」。⁴ 高度に文明化された生活環境において知能を使用する人間がかかる病であるがゆえに、神経衰弱の発症は、ときには階級や文化的洗練のマーカーとして忌避されるより歓迎されることもあった。⁵

フィラデルフィアの医師 **Silas Weir Mitchell** (1829-1914) は、この神経衰弱大ブームがはじまる 1870 年代より、次々と医学論文を発表する理論家として、そしてヒステリーや神経性疼痛まで多くの患者を治療した臨床医として、名声を博していく。神経衰弱への処方として **Mitchell** が提唱した非常にジェンダー化されていた療法が、近代西部劇の誕生に深く関わっている。**Mitchell** は女性患者には一切の刺激を遮断し徹底的に「休め」と言う一方、男性患者には心機一転「西部へ行け」と勧めたのである。それぞれ、「休息療法」(rest cure) と「西部転地療法」(West cure) という名称で知られている。⁶ 文学研究の領域では、1887 年に休息療法を指導された女性患者 **Charlotte Perkins Gilman** が、家庭生活と子育てにおいてこそ女性は心身の平穏を得るべきとする医師のジェンダー観と、「1 日に 2 時間のみの知的活動に抑えること。ペンや絵筆、鉛筆を、生きている限り触れないこと」というように知性や想像力の使用を禁止する療法へ対し糾弾の声を挙げたことで、当時の医学が振りかざしていた家父長的権威の権化として **Mitchell** はフォーカスされてきた。⁷ **Gilman** が代表作の短編「黄色い壁紙」("The Yellow Wallpaper," 1891) において自身の体験を反映して描いたのは、監視的で抑圧的な休息療法のせいで発狂してしまう女性主人公であり、作中で主人公の夫であり医師でもある **John** がその症状に対して示すのはただの無理解と恐怖のみである。**Mitchell** 式の療法は、女性の心身を治すのではなく壊すものであり、現代に至るまで「黄色い壁紙」という傑作が広く読まれているためにその理解はある程度定着してしまった。したがって、**Mitchell** が旧来の婦人科的な侵襲的／外科的療法には頼らずに、休息の指導を通して多くの女性患者たちを実際に治療してきたことや、患者たちから大統領選の出馬を提案されるまでに熱烈な信頼と支持を受けていたという事実はあまり知られていなかったし、⁸ 加えて患者の大半が実は男性であった事実はさらに知られていない。

アメリカの国民詩人である **Walt Whitman** やリアリズム絵画を代表する画家の **Thomas Eakins** に加えて、後に第 26 代合衆国大統領になる **Theodore Roosevelt** (1858-1919)、そして 1902 年に近代西部劇のはじまりとされる『ヴァージニアン』(*The Virginian*) を出版する **Owen Wister** (1860-1938) まで、彼らはそれぞれ **Mitchell** の助言や診察を受けて「西

部転地療法』という治療を体験する男性患者たちであった。東部の文明社会で神経をすり減らし消耗した彼らは、心身を病む自己を回復させるトボスとしての西部とその自然を目指し、その体験をそれぞれの作品や思想に反映させていく。というよりも、それぞれの作品や思想において表現されていることを通して、アメリカの西部という空間が、そのイメージと意味が、近代アメリカ文化の内側に生産され流通していく。その過程はただの地理的場所として広がっていた西部 (**the West**) が、世紀転換期に近代的個人の主体形成およびアメリカという国家の歴史意識のために、西部もの／西部劇 (**the Western**) という表象と物語を提供する空間へ、言説によって整形されていく過程として考えられる。⁹

神経衰弱の治療をめぐるロジックとボキャブラリーは、その西部もの／西部劇の言説編成と流通に深く埋め込まれている。本稿では、医師 **Silas Weir Mitchell** の著作やエッセイ、**Theodore Roosevelt** の西部体験記と講演、そして **Owen Wister** の『ヴァージニアン』を、世紀転換期アメリカにおける治療という課題の観点から分析したい。治療すべき対象として存在することになった個人の心身の失調、中でも男性主体たちのエネルギーの枯渇は、どのように説明を施され、どのような回復を期待されていたのか。心身機能の不可視なバランスが、どのような言語とレトリックによって可視化されてきたのか。そして、神経エネルギーの正常な活動はどのように想定され、その補填と使用の、蓄積と配分のエコノミーは、どのように作動すべきとされていたのか。また、治療のロジックとレトリックに照らして見たときに、近代特有の病に罹った個人の回復という課題は、世紀転換期アメリカのより集合的で政治的な諸トピックに対して換喩的な関係を成すことも往々にしてある。特に西部もの／西部劇の世界では、労働、人種、ジェンダー、帝国主義といった問題系と接続されるようなかたちで言説化されていることもわかる。神経衰弱患者の治療と近代アメリカ社会がはらむ諸問題への対処が、どのような言語と回路を通して結びつくのだろうか。

2. 自然という「環境」、「家」の外

1871年に第1版が発表されて以降重版を繰り返したその代表的著作『疲労と消耗』(*Wear and Tear*)において、**Silas Weir Mitchell**は近代アメリカの文明病である神経衰弱の発生要因と治療についてさまざまな仮説を提示している。議論において一貫しているのは、都市生活、頭脳労働とビジネス文化、詰め込みすぎの学校教育など、近代文明の進歩がもたらした新たな習慣が、人々の神経の「疲労」と「摩耗」を必然的に導いている、という認識だ。著作の冒頭で**Mitchell**は、神経エネルギーの消耗という近代の症状に対して、植民地期に「屋外」で生活し、「大地や水から直に身体が必要とするもの」を受け取っていた祖先たちの「精力と衰えを知らない体力」(**vigor and developing power**)を対置し、以下のように述べる。

そのようなやり方で生きていた何世代かは、活力の資本 (a capital of vitality) を貯めこむことになった。子孫たちによってこれ見よがしに行われている浪費的行動はその資本のおかげであり、祖先たちが自然との不屈の闘争 (the sturdy contest with Nature) を行ってきたゆえに可能になっているのだ。いまでもそのような生活が田舎に住む人々 (our country men) の多くによって営まれているということは、われわれの原初の力、エネルギー (our pristine force and energy) の維持のために役立ってくれる唯一の事実だ。われわれはその力の蓄積についた利子を使っているのみならず、その資本を無駄遣いしてしまっていないだろうか (Are we not merely using the interest on these accumulations of power, but also wastefully spending the capital) ? ¹⁰

ここにはまず、19世紀後半を生きる近代人たちと植民地期を生きる祖先たちの時間的な対置がある。その後にもう一つの対置が出し抜けに忍び込む—都市部で頭脳労働に従事してはその稼ぎを消費するという忙しいサイクルを生きる神経衰弱者たちと、「自然」との格闘を未だに続けている「田舎に住む人々」の空間的な対置である。後者は「原初の力、エネルギー」を維持しているが、前者の「せわしなく、懸命な」(restless and eager) 連中は「急速に成長し限界点に達するまで刺激の多い世界での日々の仕事と競争」によって「神経システム」が瓦解してしまっている。健康な状態を取り戻すためには、頭脳を酷使する「労働時間を制限」し、「新鮮な外の空気」(the fresh air) のなかで身体を動かすしかない。¹¹

Silas Weir Mitchell が神経エネルギーという生理的現象を「資本」という金融経済的なレトリックで語る際の見立ては、考察に値する。とはいえ、物理的には不可視の生命エネルギーを、あたかも超常的な見えざる手によって運動させられているように見える資本に喩えるという修辞自体は、さして目新しくて面白いものでもない。¹² 興味深いのは、神経エネルギーの「蓄積」によって生じた「利子」がどのように「使用」(spending) されているのか？という物言いに顕著なように、資本の使用と「配分」(allocation) への懸念が含まれていることである。Mitchell は、男性神経衰弱患者の多くが、未熟なうちから生き馬の目を抜くようなビジネス界へ乗り出さねばならない緊張と、その責任が強い長時間および夜間労働、不規則な食事時間や早食いなどの悪習慣によって病を発症してしまう若い「ビジネスマン」であるとする。また、医者や弁護士などの真に知的な人々と比較すると、過度の学校教育は受けてはいるがまだ知性が十分に発達しているとはいえない若年層だからこそ、重度の神経衰弱が襲いかかるとも推定する。頭脳を長時間酷使しすぎるという量の問題に、そもそも知性と人格の成熟が不十分という質の問題が混ざり込む。責任ある仕事を与えられ、誇らしさで満たされた若きビジネスマンたちは、

有頂天になって脳を使い、成功を収めるが、まさにその歓喜の瞬間に打ちのめされる。未熟なままビジネス界に打って出る者たちにあまりにもよくあることだが、これが特に借り入れた資本によって行われている場合には (**especially with borrowed capital**)、深刻な災厄である。同一人物であっても、次第に訓練されていき、無理なくゆっくりと負担を増やしていくのであれば、健康な成功をものにできたであろうというのに。¹³

つまり、神経衰弱という病は、自身で蓄積したわけでもない資本を手中にはしたが、その適切な使用と配分を知らないがゆえに性急に消散させてしまう失敗である。そんな若き都市部のビジネスマンたちに **Mitchell** が説く治療法は、「屋外生活」をしばらく試し、まずは「休むことを知らない国家」(**a restless nation**) の内部にながらも確かな「休息」を確保することであり、そこで「少しずつ増える負荷」をかけながら「漸進的」な成長を果たすことである。そうすれば「自分自身で資本を運用できる」(**command capital**) ようにもなる。そして、そんな健康な近代市民の形成のためには、「屋外の空気を吸う生活という要素」(**element of open-air life**) が必要不可欠なのである。¹⁴ このように、消耗から回復へという **Mitchell** の神経衰弱治療のロジックには、単なるエネルギーという資本の再補填だけではなく、それを適切に運用し配分する能力の養成という見地が、必ずしも明示的ではないにせよ、いつもどこかに内包されている。

この治療のロジックでは、「屋外」の「自然」が、近代都市の対蹠地として存在していなければならない。医師が患者に推奨する自然とは、ただそこにある森林や湖畔として翠緑や水面を輝かせていれば良いものではなく、治療という目的に奉仕するように措定され、フォーマット化された自然である。ここまでの論に照らして換言すれば、それはもはや手つかずの原生や未踏の自然ではなく、近代人のエネルギー／資本の蓄積と配分を、偏りのないように調整しながら、さらなる将来の発展のために回復してくれる空間として措定された「環境」(**ecology**) である。現代のエコクリティシスト **Timothy Morton** によると、歴史や社会から「超越した自然」などはすでにない。だからと言って、自然もまた文化的、社会的に人間たちのイデオロギーによって構築されているという単純な話でもない。そこに疑いなくあるのは、生命体やゴミなどの具体物も、それらに何らかの注意を向けて語ったり政治的議題にしたりする人間社会の言説も、すべてを包含した「集合的」な「存在者」(**beings**) として立ち上がる「環境」なのである。**Morton** はこのように述べる—「環境について書くということは社会について書くことであるが、それは単に環境という考え自体が社会的構築であるからというゆるい意味合いではない。歴史的な諸条件によって、社会理論が訴えかけることのできる社会—外の自然は廃棄されてきているが、しかし同時にその見出しのもとでいまだかつてないほどに喫緊なものとして社会に影響する存在がつくられてもいる」。¹⁵

すでに人間社会による価値づけや言語による修飾を免れている「社会—外の自然」などはないが、しかしその「自然」という見出しのもとで、人間社会が直面し考えねばならない事物は常に創出もされている。その力学的な事態を「環境」と呼称しようとするのが **Morton** の提案であろう。自然などもはや実在しない、と断罪する容易さに逃げることなく、自然と人間社会の相互作用として生まれる相を「環境」として捉え直してみる。文明と排斥しあう実体としてではなく、文明と自然双方の外延としてある領域が「環境」である。

意外かもしれないが、19世紀末の医療と21世紀のラディカルな哲学の言説を、ここにおいてつなげることができる。**Silas Weir Mitchell** が神経衰弱治療のロジックにおいて措定している自然は、まさに近代文明と人間社会の対蹠にありながら、その存立の意味をそれらの要請に依存している「環境」である。**Mitchell** の1877年の著作『野営療法』(*Camp Cure*) では治療のために「屋外」という「環境」で生活することが推奨される。西部転地療法と根本的には発想を同じくする「野営療法」(*camp cure*) を解説していくページで、**Mitchell** は、ニューヨーク州やメイン州などの東部、そして五大湖地方で自ら体験した夏の遊興としてのキャンプがいかに愉しみと喜びに満ちているか、そして日常的に都市生活を送る人間の消化器官や心理状態に好影響をもたらすかを伝えていく。女性患者に推奨されていた休息療法の原理と同様に、主に男性患者に推奨された野営療法においても、病への特効薬となるのは休むことである。「よいガイド」たちとともに森や海辺で過ごす「楽しい社交」の野営という時間が「休息」になるために、屋外生活は「ウォール街の働きすぎの弁護士や商人」にとって最良の病院になる。まずもって治療に必要なのは、労働や責務の「せねばならない」(*must*) からの退避であり、キャンプに流れるゆるやかな時間において「するかもしれないししないかもしれない」(*you may do or not as you choose*) ことを満喫できる弛緩の境地である。¹⁶ 過度の労働と責務の緊張は、行きすぎた文明が人間の神経にもたらした甚大な損害である。

そんな傷んだ神経を「治癒」するために、キャンプという自然「環境」での生活が提供するものが、「野蛮」(*barbarism*) である。社会ダーウィン主義のボキャブラリーが浸透した世紀転換期アメリカの言説において、心理学や教育学から、身体文化に宗教まで、幅広い領域で多用されることになる理説だが、¹⁷ 「野蛮」への回帰こそが、「文明」によって弱体化させられた近代人のエネルギーを回復させる。「文明は人々を痛めつける、そして野蛮がそれを癒す。つまり、眠れないとか、株式や配当金の夢にうなされだるい脚とともに目覚めてしまうとか、名づけようのないその他たくさんの症状を示しているくたびれた患者たちは、しばらく石掘りの生活へと入院してみるのもいいだろう」と、**Mitchell** は近代人に奨める。日の出とともに目覚め、釣りや狩りをして過ごす。暑ければコートを脱ぎ、寒ければ割っておいた薪を火にくべる。このような野蛮な状況にあると、驚くことに「喉の不調、カタルや気管支という症状」はいつの間にか改善しているものだ。自身も作家として南北戦争を題材に

したロマンス小説も残している **Mitchell** は、戦時中の極限状況では医師も目を見張るほどの速度で兵士の負傷が治癒していたとさえる。¹⁸

またキャンプ生活は、都市に対する自然の体験として「環境」化されているのみならず、「家」(house)の外に出ること自体の効用として価値づけられる。ごちなくもそれなりに客観的な言い回しで、「家」という空間自体が文明化されすぎているゆえに、神経衰弱や身体の不調を引き起こす要因になっているのではと **Mitchell** は考える。たとえば、近代の家は室内を「暖かくしすぎている」ために、出たり入ったりする際に人々が感じる外気温との差は大きくなり、「ちょっとした風邪や鼻カタル」にもかかりやすくなっているのだ。神経の治療についても、強壮剤などで人工的に刺激を与えることをせずとも、「食事、睡眠、家屋内にること」(being housed)という快適な習慣の放棄だけで即効性が得られる。¹⁹ 家の外、つまり家庭ではない外部の「環境」を言祝ぐときに、**Mitchell** は都市文明からの退避と同様に家という場からの退避と「休息」の必要性を暗に説いている。家から、つまり家庭という領域とその日々の責務から、距離を置くということ自体がもたらす効用については、そもそも **Mitchell** が男性患者のみだけではなく女性患者に対しても推奨をしていたものだ。こちらも 1877 年出版の『看護師と患者』(*Nurse and Patient*) では、精神錯乱の患者をはじめ、心身どちらでも深刻な病状にある者の看護は決して親戚や友人には任せてはならないこと、家ではなく専門的な病院へ隔離することが実際の忠告として語られている。²⁰ また、女性は家庭という領域に属すべきであるというジェンダー観を変わず維持しつつ女性の普通選挙権に反対しながらも、²¹ 1890 年代以降の **Mitchell** は、個々の女性患者に対して家庭／家事の責任 (domestic responsibilities) からなるべく身を離すようにと進言するようになる。たとえば、毎朝 2-3 時間を屋外で過ごし水彩画を描くようにと **Mitchell** に指導されたある女性患者は、それまで 20 年以上も神経衰弱を患っていたが、「外の空気」を吸いながら自分自身の創造性を発揮できる時間を持つようになってはじめて「心の平安」を得たと感謝を述べている。フィラデルフィアにある 82 エーカーの地所に建つ豪勢な邸宅の管理を、一族の妻であり母である自らの責任として神経質に引き受け続けてきたことが病根にあったこの女性こそ、**Mitchell** のいところでありまた **Owen Wister** の母である **Sarah Butler Wister** であった。²²

自然という「環境」で野蛮を享受すること、「家」の外に出ること、という治療のノウハウは、男性患者たちによる西部もの／西部劇 (the Western) の言説化にも、この上なくわかりやすいかたちで共有されている。そして、そのレトリックは、個人の治療という水準とは別の集合的、社会的な懸念への薬効のように作用している。**Silas Weir Mitchell** の患者ではなかったものの生涯を通しての知己であった **Theodore Roosevelt** は、1883 年にノースダコタのパッドランズに牧場を購入したことを端緒に、西部で牧牛と狩猟の日々を送るフロンティアの男性へと変容していった。ハーバード大学を出たニューヨーク州選出の政治家と

いう、東部の都会的洗練が服を着て歩いているような経歴に加え、喘息に苦しむ病弱な体質や、高い声、細身のズボンという出で立ちが、政敵から「女々しい」(effeminate)と揶揄されていた Roosevelt だったが、1884年に妻と母を同時に亡くし心的に衰弱したことをきっかけに、一旦政界から身を退き2年ほど西部ノースダコタでの生活に入る。²³そこで、女々しい都会の洒落者(dandy)から雄々しい西部のカウボーイへとパブリックイメージも変容させていく Roosevelt は、その西部という「環境」において、「文明から遠く離れ」、「19世紀の単調な平日のビジネス界とはまったく関わりのない、精力にあふれた原初的な牧畜生活をしていた人々(vigorous, primitive pastoral people)」と同じ体験を繰り返すことで、都会生活の疲労が治癒され、自らの活力と強靱さがあらためて呼び起こされたと喧伝する。²⁴男性性の不足を嘲笑されていた Roosevelt は、病や衰弱を西部の自然において克服するという実践によって、活力的で肉体的な「男らしさ」を繰り返し覚醒させ、その成果を次々と西部体験記として著作に記録していく。ライフルを担いで野生の動物たちと対峙する狩猟は、ただ快活で楽しい余興というだけではなく、「多くの男らしさの資質」(many manly qualities)を蘇らせる営為としても、世紀転換期アメリカの言説空間に意味づけられていく。²⁵当時のアメリカ社会で問い直されていた「男らしさ」(manliness)あるいは「男性性」(masculinity)というジェンダーにまつわる価値が、西部という「環境」における個人の経験によって、あらためて上書きされていく。²⁶

また、西部の自然とは、かつて「チュートン人」の血を引く「白人」の祖先たちが、他人種である「野蛮人たち」(savages)と競い合い勝ち取ってきたものでもある。1889年から4巻本の西部開拓史『西部の征服』(*The Winning of the West*)を書き著した Roosevelt は、未開を切り拓き文明を築き上げていった祖先の白人たちも、野蛮人たちに負けないほどの「恐るべき蛮勇」(hideous brutality)を奮っていたからこそ、この人種間の闘争を勝ち抜き文明をもたらすことになったと述べる。

その地から野蛮人たちを追ひ払った、粗暴で怒り狂った植民者に対して、すべての文明化された人類は借りがある。[...] インディアン、黒人、黄色人種といった原住民たちから、アメリカ、オーストラリア、シベリアが土地を引き継ぎ、世界を支配する人種として相続していくことは、計り知れないほど重要なのだ。²⁷

Roosevelt が描く人類の進化のベクトル線上において、太古の「野蛮」の活力に白人種が対置されているのではなく、むしろその原始的なエネルギーという資本の正当な継承者こそが白人種であり、よってその末端に近代の文明の繁栄が位置づけられる。後に大統領となり帝国主義的外交政策を推進する人物による、歴史書と呼ぶにはあまりにも幼稚な白人至上主義のファンタジーであるが、「野蛮」(savagery, brutality)を渴望する神経衰弱時代のレトリック

クを有し、また東部人エリートによる西部という自然の「環境」が措定されるという点で、この当時のアメリカ文化、社会の集合的無意識が表出している。²⁸

開拓、植民、西漸という運動は、1898年の米西戦争から帝国主義的拡大に一挙に舵を切るアメリカという新興帝国にとって、自国領土という「家」(domesticity)の外に出ていく活動でもある。Rooseveltという己の男性性に悩んだ個人が、東部という文明の家を出奔し西部という新たな「環境」で行った療養の成功は、その言説においてアメリカの男性たちに今後期待される政治的、外交的ミッションとも重ね合わされていく。1901年の講演「国民の責務」(“National Duty”)において、アメリカの男性たちは、まずもって「家庭において妻や子どもたちへの責務を果たせねばならない」一方で、「家庭の外の世界 (the world outside his home) でも力強く活躍」せねばならないと聴衆に説く Roosevelt は、「したがってわれわれの国も、まずは自国の健全さ (domestic well-being) を気にかけていなければならないが、だからといって外の諸国との関わりにおいて役目を果たすことに怖気づいてはならない」と続ける。²⁹

Theodore Roosevelt の西部体験記や帝国主義的スピーチは、実は Silas Weir Mitchell の治療的ロジックが有している前提と、その究極的な目的を、縮図化して伝えている。文明から自然へ退避すること、そして家／家庭の外へ解放され休息すること—このような Mitchell の指導は、文明や家／家庭からの完全なる逃避を推奨しているわけではない。むしろ退避や休息は、その後にあらためて文明や家／家庭に貢献するための健康を十分に回復するための、一時的な処方である。同じく世紀転換期アメリカに流通しはじめた自然保護や国立公園設立運動の唱導者 John Muir のお気に入りの用語に替えれば、それは「レクリエーション」(recreation)である。³⁰ 神経エネルギーと資本のレトリックで言えば、その後の適切で効率のよい配分のために、資本を一時的に留保するような期間である。その期間のうちに、文明のほうも、労働のほうも、そして家／家庭のほうも、神経エネルギーという資本の蓄積、配分、使用にとってより適切なありかたへと再構成できるとしたら、それはなおのこと望ましい。Barbara Will が論じるように、「一時的に、そして繰り返し」自然という環境に入っていくことで、都市における唐突な心身の消耗を、「自ら意志されたり奮闘克己を目指したりする努力」(willful or strenuous struggle)によって乗り越え、ふたたび文明を進展させるための「活力の資本」(capital of vitality)を蓄え直すことが、Mitchell の治療と Roosevelt の西部生活が共有する最大の目的なのだ。³¹ この治療的エコノミーが、近代西部劇のはじまりとされる Owen Wister の『ヴァージニアン』において、物語とレトリックの原理となっているとしたらどうだろう。

3. 西部で休む、働く、投資する—『ヴァージニアン』のエコノミー

「まるで自分が忌まわしい脳みそだけでできているのではなくて、動物か何かのように感じ始めている (I'm something of an animal)」—1885年の夏に、Silas Weir Mitchell の奨めで、はじめて西部ワイオミングを療養のために訪れた男性患者は興奮気味に日記に記した。この患者こそ、後に西部もの／西部劇 (the Western) の物語群を広い読者層に届け、西部を新たな文化のおよび政治的な意味を帯びた「環境」として近代アメリカ文化のなかに登記することになる作家 Owen Wister である。1882年にハーバード大学を卒業後、音楽家になる希望をもってパリに留学までしていたが、父からの反対もあり故郷のフィラデルフィアで法曹という実業の道へ進路転換せざるをえなかった Wister は、夢を断念した失意ゆえか、あるいは家族との不和のためか、または東部都市での実業生活の重圧と退屈のせい、心身の健康を著しく損ねる。母 Sarah の主治医でもありまた親戚でもある Mitchell によって神経衰弱と診断された Wister は、すぐに西部ワイオミングにある VR 牧場での西部転地療養へ送られる。³² それから老境に差しかかる 1928 年までの間に、Wister は計 25 回にも上る西部への療養および旅行に出かけることになり、ワシントン、カリフォルニア、アリゾナにニューメキシコなど、西部の全ての州および準州に滞在することになる。³³ その西部での体験、その地での見聞は、1891年の短編「ハンクの女」(“Hank's Woman”)を皮切りに Wister によって作品化されていく。1892年からは文芸誌 *Harper's* との専属契約を得たことで、Wister が描出する西部の物語は続々と全国の読者に届けられていくことになり、本人が言うところの「ただ地方色を鮮やかに伝えるだけではなく、特有の道徳的課題をもった、奇妙さと、野蛮さと、ペースに満ちた生活 (a life permeated with eccentricity, brutality, and pathos)」が繰り返される西部という特殊な「環境」が、世紀転換期アメリカの文芸マーケットにもその場を占めていく。³⁴

西部もの／西部劇は、もちろん Owen Wister 以前から、その輪郭がおぼろげではありながらも存在しているジャンルではある。文学史を遡れば James Fenimore Cooper が著した 1823 年の『開拓者たち』(*The Pioneers*) も当時の東部から見た「西部」へと向かうヒーロー、ナッティ・バンポー (Natty Bumppo) を描いているし、1850年代からは西部開拓民、探検家、金銀鉱労働者たちによるメモワールも多数出版されるようになっていく。³⁵ その上で、Wister の『ヴァージニアン』が定着させることになったカウボーイたちの生活、アウトローたちの跳梁跋扈、善玉と悪玉の決闘というような西部「活劇」的プロットの直接的な先駆者を名指すとする、それはおよそ南北戦争以降から 1900 年前後までの間に量産されたダイム・ノヴェル (dime novels) になるだろう。市民の娯楽として広まった安価な大衆小説の有象無象のカatalogueにおいて、ダニエル・ブーンやバッファロー・ビルなどの実在の人物から、フロンティアのカウボーイやガンマンたちを主人公として取り上げる西部ものが、

およそ 56% もの割合を占めていたという。³⁶ 共に東部のエリートであり、ハーバード大の同窓生でもある **Roosevelt** と **Wister** が向かった西部という自然は、その時点でもはや原生の荒野などではなく、すでに文化的表象によってある程度輪郭と意味を与えられていた空間でもあった。

Owen Wister の『ヴァージニアン』がそれでも近代西部劇の原型として人気と評価を博している理由はなぜかと問われれば、本稿が出す答えはいたってシンプルで、そこには文字通り近代化した西部が描かれているからということになる。1870 年代後半から、すでに鉄道網の整備も進んでいた西部では、放牧地での畜産業がある種のバブル景気をもたらしていた。いまだ産業に対する法制化が進んでいない西部は、ニューヨークやボストン、フィラデルフィアなどの東部都市、果てはイギリスやスコットランドといった外国の投資家たちから、少ない投資で多額の配当を得られる絶好の投資先と見られていた。³⁷ ノースダコタに **Roosevelt** が牧場を購入したことはこの投資ブームの文脈で理解せねばならないし、**Wister** がはじめての転地療養に訪れたワイオミングの **VR** 牧場とは、彼が一時期その下で働いたこともあるボストンの投資家 **Henry Lee Higginson** や彼のフィラデルフィアの友人たちの資金が大量に投入されていた出資先でもあった。はじめての西部行きに胸を躍らせていたら、道中立ち寄ったネブラスカ州オマハのある家で、「ピアポント・モーガン (**J.P. Morgan**) の写真が壁のラックにかかっている」ことに大変驚いたとわざわざ **Wister** は日記に記している。³⁸

『ヴァージニアン』が出版されたのは 1902 年である。その序で、まずこの小説は「植民地ロマンス」であって、「100 年前のヴァージニアと同じくらい野生を残した植民地」だった「1874 年から 1890 年」の間のワイオミングを舞台にしていると **Wister** が弁解するように述べるのは、西部劇に読者が期待するような手つかずの平原や森林、無垢で無法でゆえに自由な共同体は、すでに 20 世紀の現実には消失しているという苦い認識があるからだろう。³⁹ しかしほんとうの問題は、実のところ 1880 年代の時点でもう十分に近代化されていたのが西部ワイオミングであり、世紀転換期アメリカが抱えていた拝金主義的資本主義や労働問題、階級問題からの逃避先というよりも、むしろそれらが音を立てている震源地だったという事実だ。西部を題材にする文学の特徴として、「近い消えゆく過去」(**recent vanishing past**) にあった美学や自然を回顧するノスタルジーの形式でありながら、その歴史的なリアリティーを同時に問い直すものだと **Nathaniel Lewis** が論じているが、⁴⁰ 『ヴァージニアン』もまた近い過去をロマンス化しながら、その美化の枠組みには収まりきらない文化的ミッションに従事している—東部文明の神経衰弱患者であった **Wister** は、西部という場所、そこに生きる人々の共同体を、カウボーイの男性的美德やその溢れんばかりのエネルギーが適切に配分される「環境」として構築しようし、そこにおいて世紀転換期のアメリカ社会が孕んだ諸問題の想像的解決を図っているのだ。そのために用いられるのが先述した

Silas Weir Mitchell の神経エネルギー論的な治療のロジックとレトリックであり、この近代西部劇の原型を駆動させているのは、活力の資本の蓄積と配分をめぐる治療的エコノミーの原理である。

Owen Wister が 1890 年代に文芸誌『ハーパーズ・ウィークリー／マンズリー』(*Harper's Weekly and Monthly*) に発表していった 8 編の短編を組み合わせることで『ヴァージニアン』は成立している。よって登場人物もそれなりに多く、全 36 章におけるエピソードも多岐に渡るが、中心を成すプロットはいたって単純である。ワイオミングへ西部転地療養に訪れた語り手である新入り (tenderfoot) は、その地でヴァージニア州出身のカウボーイのヴァージニアン (Virginian) にガイドや生活の手助けをしてもらう。その後も何度かワイオミングを訪れるたび、二人の信頼と友情は深まる。あるとき、東部ヴァーモント州から大平原のベア・クリーク (Bear Creek) に新設される学校の教師としてやってきた名家の子女モリー・スターク・ウッド (Molly Stark Wood) とヴァージニアンは恋に落ちる。出自と文化の違いからはじめは心を許すことができないモリーだったが、次第にヴァージニアンに惹かれていく。牛追いの仕事、牧童一団を従えてのシカゴへの出張、インディアンからの襲撃を、などヴァージニアンのエピソードがいくつか展開された後、ヴァージニアンと牛泥棒一味との衝突、かつての親友だったが泥棒一味に加わってしまったスティーヴ (Steve) をやむなく処刑するヴァージニアンの苦悩、そして敵一味の大將格トランパス (Trampas) とヴァージニアンのウォークダウン方式でのガンファイトを経て、ついにヴァージニアンとモリーは結婚し、そして東部ヴァーモントに新郎の顔見せのために帰還する。象徴的に東部の文明的洗練と西部の野生的活力の結婚が含意されていることや、また歴史的に 1890 年のワイオミングの州としての合衆国編入がロマンス化されているのは、プロットを追うだけでも明白だと思われる。

そこに書き込まれている治療的エコノミーを、どのように読み分析することができるか。まずもっとも表面的な水準では、作者 Owen Wister 自身の写像である語り手が、西部転地療法を行なう神経衰弱者として、休息からの回復というプロセスを繰り返している。西部ワイオミングの牧場での休息を第一の目的としている語り手は、もちろん無理に働くことはしない。行き交う商人たちや牛を相手にするカウボーイたち、そして雲ひとつない空と大地に生える草を眺めながら、ただ「おだやかで、冷たくもなければぬるくもない海」にたゆたうように休み、「気がつかないうちに 5 時間もの怠惰の時間」を過ごしている。休むことを知らない東部と対称される西部では、休み息抜きをすることこそが至上の価値を置かれているので、馬たちも日中の「骨の折れる仕事」(hard work) を終えた後の夜間には、ロープにつながれることはなく牧草地に放たれ「自由に草を食べ」(graze at large) させられている。また、何の苦もなくうまく休息を取り身体の疲労を回復させることは、近代文明人が失ってしまった特殊な能力であるかのように称賛される。西部に生きるヴァージニアンはそ

んな能力を残している「珍しい人間」で、部下たちとの不和の渦中にあり頭のなかは心配事で占められているはずなのに、自らの心身を「部分ごとに分けて休ませる」(**refresh themselves in sections**) こともできるので、「頭で何かを考えていても身体はきちんと休まっている」(**To have a thing on his mind did not keep his body from resting**)。西部はまずもって理想的休息が実践されている「環境」である。一旦療養を終えて都市に戻った語り手がまた不調を再発させてしまうと、ヴァージニアンからは「都市の暮らしをやめてオレと一緒に狩りに出れば、あんたもよくなるでしょう」と西部へのお誘いの手紙が来る。⁴¹

休息だけではなく、男性神経衰弱患者の治療においてエネルギーの再蓄積と再活性化のために不可欠と見なされたのが、運動をすること、そして自ら意志し努力を注ぐ労働に従事することだった。ワイオミングの自然での生活において、都会的な家屋とは対比を成す「小屋」(**cabin**) で牛、馬、ヘラジカ、コヨーテまでの動物たちと共に暮らしながら、カウボーイたちは労働という責務を果たしつつ生命の自由も謳歌している。はじめて東部から転地療養に來た語り手も、その日常は言うなればワーキングホリデーであり、カウボーイ仲間たちとともに「金槌とのみ」を手にして働く。その下手くそな大工仕事をいつも笑われてしまうが、働くのは午前中のみのことで、午後には「狩猟に出かけたり、峡谷の入り口まで馬に乗って行って男たちが灌漑のための水路を築くのを見たり」する。「屋外の空気のなかで、この上ない充足感に浸る」(**living in the open air, and basking in the perfection of content**) 2ヶ月の滞在を満喫し、語り手は心身の健康をひとまず回復し、活力を再充填する。⁴² 西部での生活を通して、語り手はカウボーイという男性労働者たちの心身に宿る健全さを共有することになるのだ。語り手は、はじめての対面の瞬間から、カウボーイたちの肉体に走る神経エネルギーとその奥に秘められた「高貴さ」(**nobility**) を発見していた。

大胆さ、笑い、忍耐力—カウボーイたちの顔にわたしが見出したのはそれだった。彼らを知ることになったまさにその初日の印象は消えることはない。彼らには何かがあり、彼らのことを思うだけで、わたしのアメリカ人としての心は揺さぶられた (**smote my American heart**)。[...] 彼らの肉体には、わたしたちが持って生まれた情熱が湧き立っている (**In their flesh our natural passions ran tumultuous**)。彼らの魂には真の高貴さというものがしばしば秘められている。⁴³

語り手は、自らも「アメリカ人」の「男性」として、カウボーイたちと同じエネルギーを生来保有する同じ種族であるという悦ばしい認識にひとまず到達しているのだ。

しかし、Owen Wister が『ヴァージニアン』に結実していく短編を書きためていった1890年代には、アメリカ人男性という集合的アイデンティティを想定すること自体がすでにアナクロニスティックであり、身体を駆使する労働も単純にロマン化できるものではなく

なっていた。世紀転換期アメリカにおける労働を考察するとき、1886年のヘイマーケット事件を大きな端緒とする労働者によるストライキと階級間の分断という問題を避けて通ることはできない。西部フロンティアと中西部から東部の都市群への通道として伸びた大陸横断鉄道は、まさにこの紛糾の舞台となっていた。西部に療養に移動する東部人 **Wister** にとっても、そこは避けて通れない。労働運動家であり後のアメリカ社会党のリーダーにもなる **Eugene V. Debs** によって指揮された、1894年6月から始まった鉄道労働者たちによる全国的なストライキ、いわゆるプルマン・ストライキ (**Pullman Strike**) に、アリゾナからカリフォルニアを旅行中に遭遇してしまいサンフランシスコに1ヶ月近くも足止めされた乗客のなかには **Wister** がいた。ストライキの鎮静後、ようやく東部に戻る便へ乗車できた **Wister** は、鉄道労働者たちへの共感ではなく敵意と軽蔑を露わにしている—「アンクル・サムは選挙権という宝物を豚どもにくれてやってしまった。今までは銃弾で世の中を騒がしていた連中が、最近では投票によってそうしようとするので、政治家たちにもゴロつきや無政府主義者がたくさん出てくるだろう」。多くは新興移民たちから成る労働者階級は、東部の名家の出身である **Wister** にとって、同胞である「アメリカ人」と見なされてはいなかった。新興移民の労働者階級をのさばらせている元凶として、そもそものアメリカ的理念の誤解である「平等という永続する嘘」(**the eternal lie of equality**) がおかしいのだと **Wister** は続ける。⁴⁴ **Christine Bold** が「フロンティアクラブ」と総称する、**Theodore Roosevelt** をはじめ、当時同じく西部に活動と投資の場を広げていっていたハーバード大出身者たちのインサークルで共有されていた貴族的階級意識に、アングロ・サクソン至上主義的な人種観がないまぜになっている。⁴⁵

このイデオロギーは、『ヴァージニアン』という西部劇においても、労働と階級をめぐる権力関係の下地をなしている。西部における原初的な活力を具現化する男性ヴァージニアンは、同時に語り手にとって、「永らく言葉の上で信じてきた」価値である「紳士」という東部的洗練と卓越もまた血肉化した貴族的な人物として羨望の眼差しで見られる。物語の中盤から、ワイオミングの牧場主であるヘンリー判事 (**Judge Henry**) によって、全国から集まってきた野放図なカウボーイたちを統率する「牧童頭」(**foreman**) へ昇進させられ、労働とビジネスの現場の秩序維持を担うようになるヴァージニアンは、その男としての資質 (**manhood**) を必要に応じて「調教」されることも受け入れ、「手綱とくつわ」(**rein and curb**) にも従う分別さえ発揮する。作者 **Wister** のマウスピースである語り手によれば、真にアメリカ的な価値とは「最良の者が勝つ」ことであり、「真の民主主義とは真の貴族制と同一のもの」(**true democracy and true aristocracy are one and the same thing**) であるが、そのような貴族的勝者になるに相応しい男性主体がヴァージニアンである。⁴⁶

第13章から17章にかけて描かれる、牧童頭ヴァージニアンと反旗を翻そうと企むトランパスを中心にした部下たちの一触即発の緊張関係は、世紀転換期の労働および階級問題の

戯画にもなっている。シカゴに食用牛を輸送する出張からの帰路、賃金や待遇に不満を漏らす被雇用者であるカウボーイたちを、カリフォルニアにおけるカエル食ビジネスに材を取ったほら話対決 (tall tale) で言い負かしてみせる管理監督者ヴァージニアンのやりとりは、西部の平原ではなくまさに「プルマン列車」(Pullman trains) の車内で延々と繰り広げられているのだ。鉄道を舞台に起きた無知で性急な労働者たちの反乱未遂を、狡知と冷静さによってヴァージニアンが鎮めるというこのエピソードに、Wister は間違いなくプルマン・ストライキへの批判と揶揄を折り重ねている。また、西部劇的ガンファイトのアクションへと盛り上がっていく『ヴァージニアン』後半部が題材とする、1889 年からはじまったジョンソン郡戦争 (Johnson Country War) という史実自体が、そもそも資本家と労働者をめぐる抗争であったことも忘れてはならない。放牧されている迷い牛 (maverick) の所有権を誰が有するべきか、公共財として扱われていた開放地 (open range) の土地や水はどのように管轄されるべきか、といったような問題は、東部から投資された資本を後ろ盾にした大牧場主たちによる新規入植した小規模自営農民たちの暴力的締め出しへと発展していく。大牧場主たちが 1872 年に結成していたワイオミング家畜飼育者協会 (Wyoming Stock Growers Association) は、家畜の駆り集めや出荷についての取り決めを新たに制定していき、1880 年代からその方針に従わない入植者たちに牛泥棒 (rustler) の嫌疑をかけては迫害、場合によっては雇い入れたガンマンによって私刑に処していった。⁴⁷ アメリカ映画においては『シェーン』(Shane, 1953) や『天国の門』(Heaven's Gate, 1980) に描かれ国内外に知られている抗争だが、シェーンとヴァージニアンという二人の英雄の最大の違いは、前者が弱者である入植者たちの味方であったのに対し、後者はあくまでも大牧場主のために働く牧童頭であったということだ。つまり、「裁判所や弁護士がいたとしても、正直な男こそがすべての法」という西部男性の内面的倫理をもって、牛泥棒に身を落とせば旧友たちでさえ処刑するヴァージニアンは、資本家側の正義を代表している。

資本を保有する者の階層に属する「紳士」であるからこそ、ヴァージニアンには神経エネルギーという資本も備わっている。「平等」とは「アメリカの空気」(American climate) が人々に服用させている「よく効く薬」にすぎず、根本的な真理として認識すべきは「不平等」なのだという語り手の信念に共感してみせ、この世で成功するか失敗するかは「運」(luck) の有無にすぎないと述べるヴァージニアンだが、本人には運勢のいたずらを超越した資質と資格が内在している。作中で「平等」(equality) の対義語として頻出する「品格／資質」(quality) は、ヴァージニアンという人物の内側でこそ脈動しているとされる。まるで神経エネルギーのように不可視なその質は、それをわかる人にとっては目に見えるものとして顕現する。ヴァージニアン の粗野さや口汚さのなかにさえ「品格／資質」を見出すのは、語り手だけではなく、彼と恋に落ちる東部女性モリーもまた同様だ。⁴⁸ 山林でのデート中に、ひばりやらいちようのさえずりを BGM にしながらヴァージニアンの瞳を見つめたモ

リーには、不可視の質が、その「力」が、鮮やかに可視化される。

目の前にある未知の力 (a force unknown to her) によって、彼女の女性としての砦は揺るがされた。[...] 彼の瞳の冷たい輝きは、内側で燃える炎によって熱を帯びていた。その瞳はいったい何色をしているのだろうと思うと、彼女の動揺は続いた。「瞳の色って変わることがあるのかしら？」岸壁から澄んだ海水を見下ろしたときに、同じような色合いが海底の奥深くにうごめいていたように思えた。「これって緑？それとも灰色？」と問いつつも、もう一度その瞳を覗き込みはしなかった。彼女は風景のほうにずっと顔を向けていた (She kept her face toward the landscape)。⁴⁹

モリーのしぐさによって、ヴァージニアンの内的な力、そのエネルギーを、大洋の深くに流れるもの、また西部の自然風景が蓄蔵しているものと等価視するように読者は誘導される。神経衰弱治療のレトリックに照らせば、ヴァージニアンの内側にあるエネルギーは癒す力を有する自然そのもののものだ。

Silas Weir Mitchell、そして Theodore Roosevelt が共有した世紀転換期アメリカの治療的エコノミーでは、このように蓄えられているエネルギーという資本が、あらためて近代文明の健康な進展のために配分されなくてはならない。そのエコノミーが原理となっている物語『ヴァージニアン』だからこそ、西部のカウボーイ労働者でありながらまるで東部の投資家たちの利害を代弁するかのごとく、ヴァージニアンの振る舞いもまた資本家ようになっていく。部下のカウボーイであるショーティー (Shorty) に賃上げを要求された際、「生まれたときから賢くなるには遅すぎた」その愚かさゆえの浪費癖を責め一蹴するヴァージニアンは、たとえ働くべき土地がなくなろうが「オレには銀行に貯金がある」と自身の資産形成を誇る。「それを蓄えるために懸命にはたらかなくちゃなんなかつた (I had to work right hard gathering them in)。オレは自分のできることをわかっていたし、身を落ち着けてそうしてみせたのさ」と年少の部下に説くヴァージニアンは、神経エネルギーと同様に、金銭もまた資本として蓄積し後の適切な配分に活用されねばならないというロジックを体現する、近代的西部ビジネスマンの像へ変容していく。⁵⁰

ヴァージニアンが有するエネルギーと資金という資本は、そして西部という自然に、拡大しゆくアメリカ文明のために、投資されることになる。最終章「ダンバートンにて」で、妻となるモリーの故郷ヴァーモント州に顔見せに出かけた花婿ヴァージニアンは、自らが敏腕の牧場主となる未来のヴィジョンをモリーの大伯母に語る。「設備投資」(improvements) のためには雇い入れるカウボーイたちの「賃金をおさえる」(save in wages) ことをせねばならないがおそらくそれでは不十分だろうから、「石炭が出る場所」を選んで土地購入をしておいた。「新しく通ってくる鉄道」がそれを必要とするだろうから、という予測からである。

Rest and Invest in the West—Silas Weir Mitchell, Theodore Roosevelt, 『ヴァージニアン』の治療的エコノミー 17
ジョンソン郡戦争以降にワイオミングの畜産業バブルは崩壊の憂き目にあうのだが、この先見の明があったがゆえに、ヴァージニアンは「多くの企業をがっちりと掌握する」(a strong grip on many various enterprises) 西部の大物資本家となり、この西部劇は幕を閉じている。⁵¹

休むこと、働くこと、投資すること—これらの営為が最良のバランスをもって実現する西部という「環境」を言説的に編成することで、Owen Wister は、アメリカ発の神話を生み出そうとするよりも、文明、労働、階級をめぐる世紀転換期の諸問題への想像的解決を提供しようとしている。神経衰弱を患う個人を治療する西部は、アメリカ社会全体の諸症状を緩和し治療する空間にもなるのである。

4. おわりに—神経エネルギーの調整と家庭

西部という「環境」において、野生の活力と紳士としての「資質」の双方を内在させたヴァージニアンは、一方で「死ぬことも生きることと同じくらい自然」として処刑や決闘も辞さないカウボーイたちの倫理に従いながら、物語の後半には語り手の「洗練された規範」(refinements) にもよく理解を示し、「西部の連中の図太い神経」(frontier nerves) とは異なる性格を有するようになる。⁵² 法の支配がいまだ及んでいない地域で、不文律の掟に従うたくましく男性主体としての忠義、責任、そして暴力を司っていたフロンティアの「神経」エネルギーは、近代文明の要請に応じて調整され、配分させられていく。

そのヴァージニアンの変容を導き決定づけるのが、東部ヴァーモント州から教師として赴任してくる良家の子女モリーとの恋愛と結婚である。象徴的には、東部と西部の結婚、あるいはヴァージニアが南部であることを考えれば南北戦争以降の国家的ミッションだった北部と南部の再統合を意味する。⁵³ 西部劇というジャンル全般に容易に観察できる「男になるため」に女性嫌悪を示すという傾向を指摘する Jane Tompkins は、『ヴァージニアン』の結婚プロットにも「女性が男性に屈服するのみならず、東部のジェンティールな伝統が野外の精悍な男」に服従するプロセスを見ているが、本稿ではここでも治療的エコノミーが作動していることを確認しておわりにしたい。⁵⁴ 東部と西部の結婚とは、つまり文化的洗練と野生的活力が共存する家庭を創生するという文化的ミッションのアレゴリーになるが、そこでも神経エネルギーの量を微妙に調整し書き換えるというレトリックが用いられている。第 27 章において、インディアンからの襲撃によって瀕死の重傷を負ったヴァージニアンを、モリーは能動的に救出し、自宅に連れ帰り、その後友人のテイラー夫人 (Mrs. Taylor) と共に幾日にもわたって寝ずに看護する。後日やって来た医師はそのような力が女性たちに潜在することに驚きながら、「このやせた体たちに秘められた強靱な神経 (strong nerves in

slender bodies) が、他の人に頼んでやらしてもらえばいいことさえ成し遂げてしまったその傲慢さについて、口出しせずにはいられなかった」。大病の後で、自らの神経エネルギーをついに消耗しきってしまったモリーは、ヴァージニアンと並んで病の床につく。⁵⁵

ここで Wister が遂行しているのは、モリーの性格や努力を通し、東部のジェンティールな伝統の家庭イデオロギーが前提してきた女性像が、西部という別種の「環境」においても期待されるという事態を演出することだ。つまり、モリーは女性であるかぎり、家庭においてヴァージニアンという男性に献身することになる。しかし、神経衰弱時代に活力の貯蔵庫として要請された西部という空間においては、女性といえども非力で病弱であるわけにはいかない。モリーもまた、東部からやって来た文明人として、ワイオミングでは原初的で「強靱な神経」エネルギーを手に入れ、馬を自在に駆ることのできる身体性を誇示する女性になっている。端的にまとめると、東部から文明をもたらすモリーという女性は西部という「環境」に適応し、そしてヴァージニアンという男性はモリーからの文学への薫陶を受けながら東部という洗練に寄っていく。ここに Wister の西部劇が提示する、そこまで新しくはないが旧来のものとも絶妙に異なるジェンダー観と、家／家庭のモデルを見ることもできる。象徴的なことに、そんなカップルのハネムーンの行き先は、ワイオミングという西部の内側にありながらどこかエデンの楽園めいた、川に浮かぶ「島」(island) という一種の中間地帯であり、そこでの「キャンプ」なのである。これから家庭を築いていくことになる二人の甘い囁きあいのなか、ヴァージニアンは将来の計画についてではなく、自然と自己を合一させたいという欲望をあらためて表明する—「ここでキャンプするときには、オレは土になって、水になって、木になって、全部と混じり合いたい (mix with the whole thing) 気持ちになる。もう自分ってものもなくなって、また分かれるってこともなくなるんだ (Never unmix again)」。⁵⁶ Silas Weir Mitchell の「野営療法」がもっともメロドラマティックに演じられていると言えるこのエピソードは、文明と自然、洗練と野蛮、東部と西部、女性と男性が、この上ないエネルギーの配分において混合する場として家／家庭を想像している。都市生活において、過度の重責と不健康な閉塞をもたらす元凶だった家／家庭はもうここにはない。

『ヴァージアン』が言説化した西部は、世紀転換期アメリカの民主主義、資本主義、そこから派生する労働や階級、そしてジェンダーおよび家庭観にまつわるイデオロギーの緊張を一時的に休息させつつ、それと同時に再活性へ向けてその「蓄積」を「配分」し直す。その治療的エコノミーをロマンスとして物語化する文化的ミッションとして、近代西部劇は産声と銃声を上げていたのである。

註

- 1 Jane Tompkins. *West of Everything: The Inner Life of Westerns* (Oxford UP, 1992), 12.
- 2 Richard Slotkin. *Gunfighter Nation: The Myth of the Frontier in Twentieth-Century America* (U of Oklahoma P, 1998), 16-21.
- 3 George Miller Beard. *American Nervousness, Its Causes and Consequences* (G.P. Putnam's Sons, 1881), 7-8.
- 4 *Ibid.*, vi - vii .
- 5 Tom Lutz. *American Nervousness, 1903: An Anecdotal History* (Cornell UP, 1993), 4-7.
- 6 Jennifer S. Tuttle. "Rewriting the West Cure: Charlotte Perkins Gilman, Owen Wister, and the Sexual Politics of Neurathenia" in *The Mixed Legacy of Charlotte Perkins Gilman*. ed. Catherine J. Golden and Joanna Schneider Zangrando (U of Delaware P, 2000); Anne Stiles. "Go rest, Young Man," January 2012, <https://www.apa.org/monitor/2012/01/go-rest>.
- 7 Charlotte Perkins Gilman. *The Living of Charlotte Perkins Gilman: An Autobiography* (Harper and Row, 1963), 96.
- 8 Michael Blackie. "Reading the Rest Cure," *Arizona Quarterly: A Journal of American Literature, Culture, and Theory* Volume 60, Number 2 (Summer 2004): 58-60.
- 9 アメリカ西部文学や西部劇の網羅的な歴史については、See *A Literary History of the American West* (Texas Christian UP, 1987). また直近の西部文学研究の包括的アンソロジーとしては、See *A History of Western American Literature*, ed. Susan Kollina (Cambridge UP, 2015) .
- 10 S. Weir. Mitchell. *Wear and Tear or Hints for the Overworked, Eighth Edition* (J. B. Lippincott Company, 1897), 7-8.
- 11 *Ibid.*, 28-9, 71.
- 12 例として資本主義のロジックとアメリカ自然主義文学におけるレトリックの相同性についての古典的研究として、See Walter Benn Michaels. *The Gold Standard and the Logic of Naturalism* (U of Chicago P, 1988).
- 13 *Ibid.*, 63-4.
- 14 *Ibid.*, 66.
- 15 Timothy Morton. *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics* (Harvard UP, 2009), 17.
- 16 S. Weir.. Mitchell. *Nurse and Patient and Camp Cure* (J. B. Lippincott Company, 1877), 45, 54
- 17 Gail Bederman. *Manliness and Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917* (U of Chicago P, 1995), 25-31.
- 18 Mitchell. *Nurse and Patient and Camp Cure*, 46, 49. また Mitchell の生涯と作家としての活動についての評伝としては、See Ernest Earnest. *S. Weir Mitchell, Novelist and Physician* (U of Pennsylvania P, 1950) .
- 19 Mitchell. *Nurse and Patient and Camp Cure*, 48, 44.
- 20 *Ibid.*, 32-4.
- 21 S. Weir. Mitchell. "Address to the Students of Radcliffe College" (1914), qtd. in Blackie. "Reading the Rest Cure," 58.
- 22 David G. Schuster. *Neurasthenic Nation: America's Search for Health, Happiness, and Comfort, 1869-1920* (Rutgers UP, 2011) , 101-4.
- 23 Bederman. *Manliness and Civilization*, 170-5. Bederman は、Tom Lutz ら他の論者が Theodore Roosevelt もまた神経衰弱患者であったとする見方に異を唱え、Roosevelt はあくまでも喘息という当時では肺病と見なされていた病により健康を害していたとしている。See Bederman. *Manliness and*

- Civilization*, 275.
- 24 Theodore Roosevelt. *Ranch Life and the Hunting Trail* (The Century. Co., 1896), 6.
- 25 Theodore Roosevelt. *Hunting Trips of a Ranchman and Hunting Trips on the Prairie and in the Mountains* (G.P. Putnam's Sons, 1885), 316.
- 26 世紀転換期アメリカにおける「男らしさ」および新概念である「男性性」(masculinity)をめぐっての文化史の決定版として、See Michael Kimmel. *Manhood in America: A Cultural History* (Free Press, 1996).
- 27 Theodore Roosevelt, *The Winning of the West*, 4 vols. (G.P. Putnam's Sons, 1889-96), 3:45-6. Roosevelt の白人至上主義と西部体験記および西部史の関わりについては、See Bederman. *Manliness and Civilization*, 178-184, 196-206. また Roosevelt の人種主義と帝国主義および米西戦争に関わる言説については、See Amy Kaplan. *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture* (Harvard UP, 2002), 121-145.
- 28 筆者は Mark Twain の『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventure of Tom Sawyer*)においても同様の「野蠻」の活力の利用というロジックが埋め込まれていることを別論文で論じた。齊藤弘平「元気と病氣—*The Adventures of Tom Sawyer* における少年像の文化的形成」(アメリカ文学研究、48 巻、2012 年): 1-22、を参照。
- 29 Theodore Roosevelt, *The Strenuous Life: Essays and Addresses* (The Century. Co., 1901), 287.
- 30 John Muir は 1875 年の日記のエントリーで、「強制的な教育」があるのだから、心身ともに疲れ果てた近代人のためには「強制的なリクリエーション」(compulsory recreation)という仕組みも設けるべきだと述べている。qtd. in Schuster. *Neurasthenic Nation*, 137.
- 31 Barbara Will. "The Nervous Origins of the American Western," *American Literature* Vol. 70, No. 2 (Jun., 1998): 300.
- 32 Christine Bold. *The Frontier Club: Popular Westerns and Cultural Power, 1880-1924* (Oxford UP, 2013), 59-61.
- 33 Gary Scharnhorst. *Owen Wister and the West* (U of Oklahoma P, 2015), 3-4.
- 34 qtd in Scharnhorst. *Owen Wister and the West*, 27.
- 35 近年の西部文学研究では、原住民インディアンや、アメリカ合衆国に編入される以前にその地に棲息したメキシコ人たちによる手記なども積極的に対象にされている。See *A History of Western American Literature*, ed. Susan Kollina (Cambridge UP, 2015) .
- 36 亀井俊介『サーカスが来た！アメリカ大衆文化覚書』(平凡社、2013 年)
- 37 Victoria Lamont. "The Bovine Object of Ideology: History, Gender, and the Origins of the 'Classic' Western," *Western American Literature*, Vol 35, Number 4 (Winter 2001):379.
- 38 Bold. *The Frontier Club* ,66-67.
- 39 Owen Wister. *The Virginian* (Penguin Books, 1988), x x x ix . 直近の日本語訳として平石貴樹訳『ヴァージニアン』(松柏社、2007 年)がある。本稿での作品からの引用については、同訳書を適宜参考にしながら、筆者が和訳している。
- 40 Nathaniel Lewis. "Labor and the Land Narratives of Trading, Mining, and Ranching," in *A History of Western American Literature*, ed. Susan Kollina (Cambridge UP, 2015) , 73.
- 41 Wister. *The Virginian*, 32,35,131,55.
- 42 Ibid., 35-6, 44.
- 43 Ibid., 23.
- 44 Scharnhorst. *Owen Wister and the West*,75.
- 45 Bold. *The Frontier Club*, Chapter 1 Boone and Crockett Writers.
- 46 Wister. *The Virginian*, 9-10, 98, 95.

47 Bold. *The Frontier Club*, 5-9.

48 Wister. *The Virginian*, 134, 92, 235.

49 Ibid., 91.

50 Ibid., 173, 176.

51 Ibid., 322-3.

52 Ibid., 245, 256.

53 Jane Kuenz は南北戦争後の国家的「再統合と再合併」のプロジェクトの過程で、西部という飛び地においてアングロ・サクソン男性主体が有色人種に対する人種的優越を再補強する物語として『ヴァージニアン』を解釈している。Jane Kuenz. "The Cowboy Businessman and 'The Course of Empire': Owen Wister's 'The Virginian,'" *Cultural Critique*, No. 48 (Spring, 2001):103-8.

54 Tompkins. *West of Everything*, 142.

55 Wister. *The Virginian*, 220.

56 Ibid., 317.